

キリスト道講演会（東京第7回）
福音の神髄——真の幸福への道——

2008年11月9日（東京法曹会館）

奥田昌道

「福音の神髄」は実に単純なもの 日本の宗教風土 人生には補強工事が要る 讃美歌「いつくしみ深き」 讃美歌「牧主わが主よ」 「福音の神髄」の三部作 山上の説教 敵を愛しなさい 人間存在そのものが罪 十字架の赦し 空気のように無条件 祈るときには 天に富を積みなさい 体のともし火は目 求めなさい 狭い門 私のもとに来なさい 最も重要な掟は何ですか 永遠の生命 イエスは命のパン 新しい掟 イエスは父に至る道 聖霊を与える約束 イエスはまことのぶどうの木 パワロのローマ書 祈り

●「福音の神髄」は実に単純なもの

皆さま、ようこそいらっしゃいました。

今日の講演会は、私は本当に素晴らしいものになると確信しています。だから、皆さんに来て欲しかった。このことは自分の思いから出たものではありません。私はつくづく思います。日本のクリスチャンは、あるいは教会は、キリストという方の理解を難しくしすぎている。キリスト教というものを難しく考えすぎている。非常に単純で簡単なものなのに、非常に難しいもののように造りあげてしまつて、それで自分で苦しんでいるのではないかと思つていきます。

今日は、「福音の神髄」というたいそうな題を掲げましたけれども、福音は実に単純なものですよ、ということをお願いしたい。はつきり言つて、この場に靈なるキリストがご臨在くださらなかつたら、この講演会は無意味です。この場にキリストが見えないけれども、立つていてくださる。そして、ご自分の靈をふんだんに皆さんの中に注ごうとしておられる。

我々は実際に生活する人間です。喉が渴けば水を飲みます。

「私を飲め」

と、キリストは言われた。

「渴ける者は私のところにいらつしやい。本当にふんだんにこの生命の水をあげよう」

と。それを「要りません、要りません」と言っているのが人間ではないかと思う。人間が一番欲しいのはやはり生命、永遠の生命でしょ。もう明日死にゆく身はというのは儂い。でも、「たとえこの身は朽ち果てても、明日はもつと凄すこいところに行ける。キリストが待つておられる素晴らしい御国みくにがある」



と。こういう希望がなかったら、生きている甲斐がないではありませんか。若い人はそう思わないかもしれない。若い人はまだまだ永遠の未来、素晴らしい輝ける未来があると思つて、皆がんばって頂点へ向かつて行く。だんだん歳をとりますと逆に下降線をたどることになる。「行く先はどこかの谷底か」

というのが普通の人生なんです（笑）。でも、谷底が近づいてきた時に目が醒めても、もう遅いんです。もう一回頂点へ登れない。やはり早いときから——皆さんは保険をかけておられますか、年金は大丈夫ですか、なんていうことではないけれども——天国へ通じる保険をかけていないと困るわけです。古来、人間はみんな永遠の生命を求めてきたんです、いろんな形で。誰も人間は、

「50歳で死んで、もう満足だ」

という人はいないと思うんです、よほどの厭世家でない限りは。

「もう地上は苦しくてしょうがないから、早く向こうへ行かしてくれ。でも、向こうつてどこなの？ 地獄!? もっと困るよ！」

と。そんなところへ行くのでは困るわけです。みんな永遠の生命を求めている。だから、中国の昔話に、

「不老不死の薬を求めて」

というような話があります。でも、不老不死といつても何百年もよれよれのガタガタの身体で生きるというのも地獄ですよ。弱った身体で生きるも地獄、早く死ぬのも地獄。これが現実ではありませんか。

私は「福音の神髄」という大それた題を掲げましたけれども、福音は誰でも無条件に直ちにすつと受けとれるものだと思う。受けとつたあと、それを継続させることが大事です。受けとつたあと、今まで下降きみであった生活が、今度は上向きのカーブに変わる。日本経済もそうなつて欲しいけれども（笑）。しかし、この変化は悔い改めないとおこりません。お金ばっかり追い求めていて、馬車馬のように働くだけでは無理です。もうこれは少々地獄を味わわないといけない。大丈夫ですよ、本当に神さまを信じておれば大丈夫。

キリストが生きていた時代とはどんな時代だったのか？ 金持ちばかりがいた時代ではない。裕福な時代ではありません。貧乏な人が多かったと思う。それから、病気だつて、そう簡単に治らなかつた時代だと思う。あらゆる面で満ち足りていなかった。今と比べたら、実に貧困な時代です。そのときに、キリストは福音を語られた。

日本で言いますと、親鸞や法然などの僧侶により鎌倉仏教が創唱された時代にあたります。あの時代も豊かな時代ではありません。この世的な現世には望みなき時代です。少し後の時代の良寛さんなんか、やがて身売りしなければならぬ子どもたちと手鞠てまりをつきながら泣いていた。どうにもしてやれない。親鸞だつて、法然だつて、みな同じでした。

「けれども、この地上の現世を超えたものがあるよ」



ということをあの方々は身体によって体得しておられたから、それで人々を癒していかれたわけです、心を魂を。そして、親鸞さんだったら、

「極楽浄土がある。弥陀の本願が絶対に救うから。すぎる者は必ず救われる。南無阿弥陀仏と称えるだけでいい。本願を妨げるほどの悪は世の中にない」

と。そう言っただけでいい。本願を妨げるほどの悪は世の中にない。南無阿弥陀仏と称えるだけでいい。本願を妨げるほどの悪は世の中にない。そのように一般の庶民・凡夫の救いを真剣に唱えた方々が日本の鎌倉時代にはいたわけですが、キリストはもともと早い時代にいらつしやうした。キリストはもともと以前からの歴史をうけて、あの時期に現れてくださったわけですね。イスラエルには旧約時代の歴史があり、イスラエルの民族の中からキリストは現れた。けれども、キリストは一つのイスラエル民族に囚われる方ではありません。まさにイスラエル民族の中から現れながら、全世界に向かつて、

「本当の救いとは何か、本当に人間が求めているものは何か」

ということを、身体をもつて現してくださいとお方です。そのお方は死にっぱなしではない。確かに十字架で息を引きとられた。弟子たちはがっかりしました。

「もうこれでお終いだ、夢も希望もない。この方こそは、わがイスラエルを復

興してくださるお方だ、ダビデ王国を築き上げてくださるお方だと思っ

たのに、あえなき最後をとげた。本当にあえなき無惨な最後をとげた」

と、失望落胆していたら、キリストは霊体となって現れて来られた。

「私は生きていますよ。私の体に触ってごらん。脇腹に触れてごらん」

と言って、本当に弟子たちの前に現れてくださった。そして、40日間、地上にたびたび現れて、それから父の御許に昇られた。もちろん、昇りつぱなしではない。

「あなた方に聖霊という生命の霊を与える。そのために向こうへ行くのだから。

だから、祈って待つてなさい」

と。10日間祈っていたら、聖霊が降ってきたでしょ、火のごとき聖霊が。そこから本当のキリスト教というのが始まった。そのことを現在では忘れてしまっているようです。

キリストは何のために来てくださったか。我々凡夫を、凡人を、どうにもしようがない人間どもを救うという目的で来られた。「救う」というのは、病気を治すとか、不老長寿の生命を与えるとか、そういうレベルのものではありません。我々をキリストと同じ姿に化することが目的です。愛そのものです。そうすれば、憎しみも何も消えてしまいます。全世界が本当にキリストのような人物ばかりに溢れてごらんください。軍備はいらないでしょ。刑務所もいらなくなります。もう実に無駄なお金全部要らなくてすみません。ところが、そうしたことをやらないで、人間はしょうがないものだとか決めつけて、その前提の上に政治や制度もみな築きあげているわけです。

「警察官も、軍隊もこれだけ要ります。裁判官もこれだけ要ります。病院もこれだけ



「けやります」

といういろいろやっているわけですよ。病院を整備することはしようがないでしょうけれども。なにかキリストが語られたことは別世界の夢物語だというふうに、みな勝手に思い込んでいるのではないのでしょうか。

「それはさておき、我々は現実生活をきつちりやりましょう。それには政治はかくあるべきである。経済はかくあるべきである。法はかくあるべきである」

と、知恵をしぼり、知力を結集してやっているわけです。

それから、自然科学の発展は凄い。本当に科学技術は生活を便利にし、経済発展に大きく貢献してきた。でも、所詮、学問の世界、科学の世界は地上のこの世のことです。医学も、その他の自然科学も、

「人間の地上の生命をいかにして長生きさせ、病気をなくして、生きられるようにするか」

ということを一生涯懸命にやっている。これには感謝します、本当にありがたい。けれども、キリストはそれを超えたものを、別次元のものを持ってこられた。我々の住んでいる3次元の見える世界と異なる、見えないけれども実在する世界をはつきりと示された。この世界をどうしても想定せざるを得ない。見えない世界——想定範囲外なんていう言い方がよくありますけれども——その世界を想定せざるを得ない。我々はどんなにがんばったって、神さまを見ることができません。神さまを見た人がありますか。

「私は神さまを見ました」

と言っても、幽霊を見たのかもしれない。誰も確信をもって、「見ました」なんて言えない。神さまはどうもあるらしいけれども、誰も見た者はいない。

「神を信じろと言われたって、そんな見たこともない、さわったこともないものを信じろというのは無理ですよ」

と。そうでしょ、当たり前の話です。ところが、その我々が見たこともない、つかむこともできない、信ずることもできない、そういう神さまを具体的に表してくれた方がイエス・キリストなんです。これは凄いことと思いませんか、皆さん。イエス・キリストは凄いなと思われませんか。これは本当に驚きの世界なんです。今日、讚美しました二つの讚美歌（312番「いつくしみふかき」、354番「かいぬしわが主よ」）。私は、これは素晴らしい讚美歌だと思います。歌っている涙が出てきます。イエス・キリストは讚美歌の歌詞のとおりのお方なんです。決して、死につばなしではない。今もありありとこの場に見えないけれども、ご臨在くださって、

「そうだよ、そうだよ。私はこんな人間——あるいは霊、霊的人格——こういううろだよ」

と言っておられる。でないといこんな歌を歌っても何もなりません——「何もならない」と言ったらちよつと言い過ぎですけども——本当にこれはリアリティなんです。



キリスト教思想家のヒルティは非常に敬虔な信仰深い人でしたから、

「神さまに直結しろ。神の御意みこころにかなうような生活をしろ。神と共にあることが幸せへの道だ。神のみそば近くにあって、神の望みたもう御意にかなう有益な仕事を生涯やりぬく。そして、人格的に神さまのような、

彼は「キリストのような」と言いますが、

そういう人格に自己形成していくことが人生の意義だ、目的だ。ところが、教会はそういうことをやってくれない」

と言って、当時の教会に対する非常に強い批判をした。批判というか愛ですね。本当の教会はこうであってほしいという願いをこめながら、現実の教会では、特定の信条——「使徒信条」とか、そういった教義——を信奉して、教会に集う人々がちつとも変わらない。教会という団体に属していることで安住している。社交の場になっている。

「教会の礼拝に参加して、教会から出て行くときに別人のようになって輝いて出てこなければ、その礼拝は偽りだ。だから、教会とか伝統的なキリスト教というも

のではなくて、各人が神さまに直結しろ」
と言う。そして、彼はキリストをモデル、模範にした。キリストは、ヒルティにとつてはどこまでも模範なんです。そして、一種の自己修養と申しましょうか、それによって

「キリストのような霊的人格に自己形成していく、これが人生の目的だ」

というふうに言います。もちろんヒルティはひとりでそれができるとは言ってない。

「神の霊の助けが要る」

と言う。これは聖霊のことです。ただ、ヒルティは、

「その聖霊はどうやって我々に宿ってくださるのか、そのプロセスはわからない。けれども、人生の中で必ずそれを体験しないことには、神さまのことはわからない。

聖書のことにはわからない。聖書が聖霊と名づけるこの不思議な霊、これを宿さな

いことにはキリスト教もわからない。聖書もわからない。生き生きとした信仰も出てこない」

と言うんです。「喜びの霊に導かれた喜びの生涯」と彼は言う。だから、そういうヒルティが歩いている喜びの生涯は、私たちにとつても、とても望ましい素晴らしいものなんですけれども、そのプロセスはわからない。彼はキリストをモデルにしています。模範なんです。

「素晴らしいお方だ、比類なき人格である」

と言っています。そして、『キリストに倣ならいて』というトマス・ア・ケンピス（中世のキリスト教的神秘思想家）の文章がありますけれども、それを彼は非常によく引用します。

●日本の宗教風土

私ども日本人はどうでしょうか。日本人の我々から見れば、教会に対する批判はヨーロッパ



パのキリスト教の現実に対するヒルティの愛の答むちなんですね。「かくあつて欲しい」という願いでやっています。そうした精神土壌の中で彼は百年前にあのように叫んでいる。

我々日本人はどうでしょうか。日本は法然、親鸞といった素晴らしい宗教者が既にいたわけです。もちろん、キリストがいた時代から千年後ですけれども。しかも、日本には古来から神道があり、その後、仏教が入ってきた。その仏教がさらに練られて、1200年代に鎌倉仏教が創唱され、非常に洗練された日本的な姿をとった。そのあとで儒教、朱子学、陽明学などが入って来ています。それらによって我々日本人の精神土壌が耕されている。決して日本人は、

「自分たちは非宗教的民族だ、宗教性がない」

とか、そんなことを嘆く必要はない。私はそう言いたい。しかし、だからといって、

「日本に入ってきたもの、それによって本当の永遠の生命、死んでも死なない生命が私の中に来ています」

と、一人ひとりが断言できるか。ここに問題があると思っています。現実感のあることになれば、思われた観念的な世界ではだめですから。描いたものを見て、

「ああ、好いいな、このビフテキはうまそうだな」

なんて言ったって、描かれているものではない。これを「絵に書いた餅」と申しますよ。食べられるものでなければいけない。

私なぜ、日本人の宗教性を肯定するかといいますと、やはり日本は自然風土が素晴らしいからです。まずは富士山、我々日本人は崇高な山という観念を持っています。素晴らしい富士山の崇高性というものを私は感じます、特に雪をいただいた富士山などは。だから、古来、神の住む山、崇高なる富士山という思いを日本人は持ち続けてきたと思います。それから、海です。

「海には海の神様がいる」

と信じてきました。だから、海が荒れたならば犠牲を献げる。人身御供ひとみごくうまで献げた。竜神を鎮しずめるために。そんな犠牲というものを私たちは望まないけれども、そういうことまでやった。山には山の神様があり、海には海の神様があり、家庭に帰れば、家の神様もいらつしやる（笑）。

「自然の中に神が宿っておられる」

という、非常に素朴な宗教性というものを持つているわけです。伊勢神宮だつて実に清らかな感じがいたします。菅原道真すがわらのみちざねは学問の神様として祀まつられる。八幡太郎義家はちまんたろうよしえは八幡様ですか、いろいろ日本の歴史上の偉人もまた神として祀まつられたりしている。つまり、

「人間を超えたすごいものが在る」

ということとは信じているわけです。それから日本のご家庭にはご仏壇があるでしょ。ご仏壇に皆さん礼拝なさつて、そして何かといえはご仏壇にご報告をしたりする。つまり、祖先と



いうもの——祖先と言ったって何代も前の遠い祖先ではない——親父さん、あるいはお祖父さんお祖母さん、そういった近い先祖の霊が自分たちを守り導いてくれているという信仰があるんです、素朴ながら。お盆になったら帰ってくる。お盆が終わったら、またお送りする。日本人は決して、「死んだらお終い」なんて思っていない。「向こうの国が在る」と思っている。しかし、

「その向こうの国というのはどんなものかというのはいくくわからない。しかし、何かありそうだ」

と。そういう感じ方をする日本人の宗教性というものは豊かなんです。ところが、神様とは何かをつきつめて思ったり考えたりしていない。最後のところまで突き詰めていない。それに対して決定打を示してくださいだったので、私はイエス・キリストだと思っっている。私も日本の宗教風土の中で育ってきました。崇高なるものに対する憧れもありました。

「自分が罪に汚れた人間だったら、決して神の祝福を受けるに値しない。神社にお参りする時でも汚れた人間はお参りするに値しない」

と、そう信じていました。でも、本当の意味で「永遠の生命」を約束し、無条件に与えてくださる、そういう方を知らなかった。さきほど、いろんな神社仏閣のお話をしましたが、日本でお参りするのは、守ってほしいからなんです。受験にさしかかれば、合格祈願をする。私は法科大学院の教授をやってきましたが、法科大学院の一人前の学生だって、やはり、そういう時にはお守りを持ってますよ。何かにすがっています。誰もそれは笑えない。何かにすがりたいんです、守ってくれるものに。それは人間の本性だと思えます。

●人生には補強工事が要る（ヒルティ）

今日、皆さんのお手許に、こういう小冊子（『幸福への道』カール・ヒルティ「幸福論（第三部）」から。NHKラジオ深夜便「こころの時代」2008年4月18日放送）を差し上げてあります。この中でヒルティは、「二種類の幸福」ということを述べ、ある中世の著述家の言葉を引用して、

「人生には補強工事が要る」

ということを言います。その「補強工事」というのは何か。

「自分自身の中にそれを求めても無駄だ。自分の中から出てくるものでこと足りるなら、わざわざ補強工事をする必要もない。自分を越えた何ものか。外側から流れ込んできて、そして自分たちを支え導き、守ってくれる。いついかなる時でも無条件に、直ちに、どんな境遇にあつても、きつと現れてくるような補強工事が必要だ」

とヒルティは言っている。皆さん、お手許にお持ちでしょうから、その9頁のところです。

「最近歿したばかりの或るドイツの著述家がのべた「人生は補強工事を必要とする」という言葉が、きわめて正しいものとなる。ただ彼はその補強を間違った場



所に、すなわち、人間生活そのもののなかに求めている。だが、そこにはいずれにしても、そのような補強力はつねに見出されるわけではなく、老年や病氣、孤独や困窮に際してそういう力は与えられず、それどころか、そのような逆境が相携えておしよせることもしばしばあつて、そうした場合には、元来もつとも強い精神でさえすつかり屈服させられることもある。われわれは、あらゆる困難に対して常におこたりにくく用意されているある助力を必要とするのである。われわれは自分の幸福を、いつでも得られ、まただれもが得られるものの上に、築かなければならない」

と。このような理解は素晴らしいですよ。「いつでも得られ、誰でもが得られる」という。無条件ということですよ。

「こちらの善、不善にかかわりなく、無条件に直ちに与えられる。そういう補強工事が必要だ。われわれが必要とするのは、自分のなから出てくる力ではない。自分の力でこと足りるのなら、力の不足をさほど痛感しないであろう。

では、何が本当の補強工事かということを次に言ひまして、

人生のまことの補強工事とは、神のそば近くあることと仕事である。その結果自然に生ずるものは、あらゆる被造物に対する愛である。ただしこれは、最初から無造作に得られるわけにはいかないが。

今言った、「神のそば近くある」ということと「有益な仕事」、神の導きの中で行う有益な仕事。天職ですね。

これ以外のものはすべて人間の心を完全に満足せしめるには、あまりにも卑小である」

と言っている。では、我々にとって補強工事というのはどこにあるのか。さきほど述べた神社仏閣、ご仏壇、そういうものであるのだろうか。私はそれ以上のものであると思う。今までのいろいろ述べたものは多少の補強工事にはなるけれども、決定的なものではない。

決定的なものがひとつ現れた。それはどこに現れたか。イエス・キリストという人格において現れた。しかも、このイエス・キリストという人格は——ユダヤ民族の救い主がベツレヘムにお生まれになった——ユダヤ民族の救い主でもありますけれども、ユダヤ民族は、彼を救い主とは信じていない。むしろ、全世界の人々の救い主であり給うお方です。東西も南北もない、民族の違いなんて問題ではない。およそ人が人であるかぎり、人は本来、神の似姿、神の本質を宿すものとして存在している。その本来の本当の人らしい人に回復するため、キリストは現れてくれた。キリストは自分のことを何と言っておられるか。そして、神さまのことを何と言っておられるか。「父よ」と呼ばれた。

「父よ、あなたの御意を！」



と。ヨハネ伝では、神さまのことを、

「私をお遣わしになったお方」

と言っています。派遣社員なんです、キリストは（笑）。本当に派遣されてやって来た。遣わされてやって来た者は、遣わし給うた方の御意だけを求めて生きる。徹底的に。ここが凄い。自分のことを思っていない。

「あなたの御意は何ですか。あなたは何を私においてお望みですか？」

と。キリストの霊は父と共に居たら幸せだった。本当に幸せだった霊なるキリストが人の姿をとって現れた。マリアさんの中に宿ったということになっています。キリストは人でありながら、もともと神の御許みもとに居た霊でしょ。それが地上に肉体をもって現れたんですから、始めから両方の性格を持っています。神さまを慕わざるをえない。自分の故里ふるさとは天なんですから。

しかも、慕う時には「父よ」と呼び、「父と子」という関係です。使命的存在としては、派遣社員という使命においては「主よ」と呼ぶ。神は主で、自分は僕しもべです。僕は主の意こころだけを大事にする。主の意のとおりに生きる。武士道の精神はそういうところがある。「忠臣蔵」の精神にはそういうところがある。主の意だけを意として生きる。それに自分を献げきっていく。

こうしたことは普通、我々にはできない。一時的にはできるかもしれない。けれども、生涯を貫いて行うことは、私にはできない。ヒルティは一生懸命にそれをやった。あの人は立派な方です、本当に立派な方ですよ。

「努力しろ！ 己の意志を開け渡せ！ そしたら、ひとりでにあとほうまくいく。」

聖霊が助けてくれる」

と言うんです。私はそんな優等生ではないので、

「いやあ、そんなの簡単にはいきませんわ」

と。でも、キリストはありがたい方です。神さまと我々人間どもの真ん中に立つ仲保者ちゆうぼうです。つまり仲立ちをする人です。片一方では、神さまの御意みこころを100%受けて、私たち人間に向かつてはそれを流してくれる。

その御意が仲保者の媒介なしにエホバの神さまから人間に直ちに来たら、これは恐ろしい旧約の審判さばきの世界になってしまう。人間は出来が悪いから、穢けがれている人間は、恐ろしくて誰も神の前に立てない。神の姿は、見てはいかん。モーセの時から後ろ姿しか見てはいかん。ところが、キリストは神さまと我々の間に立って、神の光、愛、生命を100%受けて、それを我々に惜しみなく流してくださった。トランスレーター（変圧器）の役目をしてくれた。1万ボルトの高圧電流がキリストによって普通の100ボルトのやさしい電流に変えられ、我々の生活に役立つしてくれる。まあ例えて言えば、そういうお方ですよ。我々が直接、「父よ」



とか「神よ」とか、呼べと言ったって、呼べない。神のことがよくわからないからです。それをキリストは、

「私を見た者は父を見たんだ。私の中に父がいらっしやる。三年間も一緒にいたのに、まだわからないの？ 私を見た者は父を見たのだ。私と父とは一つだ」

と、ピリポに言われた。だから、人間としての姿をとっておられるイエスというお方の中に、神を見た人は幸いなんです。それがなかなか見えない。それでみんな躓いた。

●讃美歌「いつくしみ深き」

今日歌っていたいただきました讃美歌を少し^{たど}辿ってみたい。まず、讃美歌312番「いつくしみ深き」から行きましょう。

- 1 いつくしみ深き友なるイエスは 罪とが憂いをとり去りたもう。
こころの嘆きを包まず述べて、 などは下ろさぬ、負える重荷を。
- 2 いつくしみ深き友なるイエスは、 われらの弱きを知りて憐れむ。
悩みかなしみに沈めるときも、 祈りにこたえて慰めたもう。
- 3 いつくしみ深き友なるイエスは、 かわらぬ愛もて導きたもう。
世の友われらを棄て去るときも、 祈りにこたえて^{いたわ}労りたもう。

「いつくしみ深き友なるイエスは」という。ところが、ヒルティにとつては、キリストは「友」ではなかった。いうならば、模範生、兄貴です。尊敬すべき兄貴なんです。だから、「兄貴のごとく弟もなれ」という感じです。また、彼はそうだったと思う。だから、あのようニコニコして、祝福に満ちて、我々に語りかけている。けれども、私にとつてはやはり、イエス・キリストは「いつくしみ深き友なるイエス」です。皆さんにとつても、そうだと思います。「友なるイエス」です。

「罪とが憂いをとり去りたもう」

我々と神さまとの間を妨げているのは、この「罪・咎・憂い」です。これのない人はいないはずです。お釈迦様は悟りを通して、罪・咎・憂いを脱却されたと言われていますけれども、我々凡人はそうはいかない。坐禅を組んだら、罪・咎・憂いが本当に消えるか、それは私にはわからない。でも、キリストは具体的に、罪・咎・憂いを自分の身体に背負ってくれた。それが十字架にかかってくれたことです。全部、引き受けてくれた。

「引き受けたから、大丈夫だよ！」

と我々に向かって仰ってください。ヒルティは、なぜキリストをそのように受けとらなかつたかと言うと、当時の人々があまりにも安直に十字架を受けとつた。どの教会にも十字架がある。

「あつ、これでみな赦されている。これで大丈夫なんだ。教会に属していれば、そ



れでいい。礼拝に20分か30分行けば、もうそれでいいんだ」と、こういうふうにあまりにも安直にキリストの救いというものを習慣化して受けとった。それに対するプロテスト(抗議)なんです、

「もう一度、原点に帰れ」

と。それに対して、私どもはそうではない。ヒルティはヒルティ。我々はどうかというと、やはりこの「罪とが憂いをとり去りたもう」ということが絶対に必要です。伊勢神宮にお参りするのには、五十鈴川で水をかぶろうが、清めようが、清まるわけではないと思います。塩をふりまいたからといって、清まるわけではない。あれはシンボル(象徴)ではありませんけれども、本当に我々自身が根底から清まるかということ、清まらないと思います。

キリストが全部引き受けてくれた。十字架にかかり全部引き受けてくれた。

「あなたは清い。私が全部、あなたの穢れを吸い取ったから。そして、私の中の清らかなもの、生命を全部やるよ」

と。交換輸血をしてくださった。本当にそうです。それが愛です。十字架において現れた神の愛というのは、そういうことなんです。

「このころの嘆きを包まず述べて」

我々は自分の中なる思いを訴えるお方、語り告げるお方、そういう方が欲しいですよ。

「などかは下ろさぬ、負える重荷を」

どうして下ろさないの？ 自分で重荷を背負ってばかりいないでと。

「いつくしみ深き友なるイエスは、われらの弱きを知りて憐れむ。」

我らは弱い。「いや、私は強い。そんな助けは要らん」という方は、まあしばらくそのやり方でやってください(笑)。やはり人間は自分の弱さを認めて降参しないと、どうにもなりませんから。私は決してその人たちに、「今すぐに自分の弱さを認めろ」なんて言いません。

「悩みかなしみに沈めるときも、祈りにこたえて慰めたもう。」

いつくしみ深き友なるイエスは、かわらぬ愛もて導きたもう。

世の友われらを棄て去るときも、祈りにこたえて労りたもう。」

という。

●讃美歌「牧主わが主よ」

それから、その次の讃美歌354番「牧主わが主よ」。

- 1 牧主わが主よ、まよう我らを 若草の野べに導きたまえ。
われらを守りて養いたまえ。 我らは主のもの、主に贖あがなわる。
- 2 良き友となりて常にみちびき、まよわば尋ねてひき返りませ。
われらの祈りを受入れたまえ、我らは主のもの、ただ主に頼る。
- 3 赦しのみ誓い、救いのめぐみ、きよむる力は皆主にぞある。



4 我らをあがない生命をたまう、我らは主のもの、主に在りて生く。
御慈愛をば我らに満たし、
今よりみむねをなさしめ給え。

我らをあわれむみ恵みふかし、我らは主のもの、主をのみ愛す。
「^{かいぬし}牧主わが主よ、まよう我らを」と。キリストは牧者なんです。我々を導いてくださる牧者です。ヨハネ伝10章に出てきますが、牧者キリストなんです。我々には迷いがあります。そういう迷う我らを導いてくださる導き主です。

「若草の野べに導きたまえ。われらを守りて養いたまえ。我らは主のもの、主に贖わる」

「主に贖わる」は「既に主に贖われたり」と読んでほしい。これから贖われるのではない。「主のもの」というのは、

「もうあなたを贖ったから、あなたは私のものだよ」

と。「きれいになってから来い」とは仰らない。

「私がきれいにしたから、おいでよ。もう抱いているんだよ」

と。「きれいになってから来い」と言われたら、行けないですよ。「仲直りしてから来い」と言われたら、仲直りできないですよ、人間同士は。

「私の所に来い。あなたのその敵意、憎しみを全部私が片付けたから。私という質を、私の霊を受けとってごらん。これは愛の霊だから。敵のために祈る霊だから、その霊があなたにくつついたら、そのようになるよ」

と。これが福音なんです。

「良き友となりて常にみちびき、まよわば尋ねてひき返りませ。」

われらの祈りを受入れたまえ、我らは主のもの、ただ主に頼る」

ただあなたにだけ自分を委ねてまいりますと。

「赦しのみちかい、救いのめぐみ、きよむる力は皆主にぞある。」

我らをあがない生命をたまう、我らは主のもの、主に在りて生く」

「生命をたまう」ではなくて、「生命をたまえり」と、もう既に生命をたまえりという気持ちで歌うことです。主に在りて今、生きていますと。

「御慈愛をば我らに満たし、今よりみむねをなさしめ給え。」

この「御慈愛」の实体は何かというと、聖霊なんです。助け主、聖霊。これは後で申しますが、「慈愛」の实体は聖霊です。ヒルティは「神の霊」と言っています。それを私たちに満たしてくれる。これがあるからこそ、^{みむね}聖旨を行っていくことができる。聖旨を果していくのは、この聖霊というお方の導き、助け、ご助力によってやっていくことができます。

「我らをあわれむみ恵みふかし、我らは主のもの、主をのみ愛す。」

当然ではないですかと、歌詞は言っています。

「あなたを愛さないではいられないではないですか」



ということ。ヒルティは、「神を愛せよ」と言うんですよ。私は「愛せません。神さまはわかりませんから」と言う。神さまが愛してくださっている。

「神はキリストにおいて私たちを抱いてくださっている。それに気付いたら、キリストを慕わざるをえない。キリストを愛さざるをえません」

と全部、私にとっては順序が逆です。ヒルティさん、すみませんね。そういうことなんです。

●「福音の神髄」の三部作

お配りしたプリントの言葉を味わっていきなさいと思います。これは三部作と言っている。この三部作というものは、どういう構成になっているかと言いますと、第一部はマタイが中心です。しかも、キリストの言葉が中心です。キリストの行為の面は今回は取り上げません。マタイの福音書を取り上げて、マルコの福音書が一か所だけ出てきます。マルコ福音書12章です。ここまでがマタイ伝中心の第一部です。

次はヨハネによる福音書が出てきます。これが第二部。マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネの四福音書があるけれども、マタイ・マルコ・ルカは「共観福音書」といいます。キリストの言葉とキリストの行為を同じような視角から、人間としてのイエスを見て。同じような角度から見ているのが、マタイ・マルコ・ルカの二つの福音書です。共に観るということで「共観福音書」という。それに対してヨハネ福音書はちよつと違います。これはキリストの行いを、いわば手段にすぎないと言いますか、話を展開させるひとつの道具として扱っていると言ってもいいくらいで、中心は「永遠の生命」を、永遠の御国^みそのものを我々に語り告げている。つまり、我々のハートに、霊に語りかけている、霊の福音書と言ってもいい。マタイ・マルコ・ルカは、キリストの言葉や行為を扱っている福音書ですけども、ヨハネの福音書は霊の次元の深い福音書というふうに見えていいと思う。それで、ヨハネの福音書からかなりたくさん聖句を集めてきました。これを全部、読んでいきます。

それから、第三部は、交響曲でいえば、第一楽章、第二楽章に続く第三楽章という感じになるけれども、「ローマ信徒への手紙」から始まります。パウロの言葉を集めました。やや神学的な角度からの話になります。

「罪とは何ぞや。救いとは何ぞや」

と。そういったスケールの大きいパウロの福音把握がテーマです。この三つをこれから見ていこうと思います。

「神とは何ぞや、キリストとはどういう方か。永遠の生命とは何ぞや。死んだあとはどうなるのか。何が神に喜ばれるのか?」

なんていうことを頭でいろいろ考えるよりも、直^{じか}にキリストの言葉に触れること。これが大



事です。キリストの言葉を聞く時に、あなたご自身に今、ここにいらつしやるキリストが直接語りかけておられるという角度で受けとつてください。そうすると、

「本当にこれは生命の言葉だ」

ということがよくわかります。キリストがこの言葉を通して我々に語りかけていらつしやる。これは何千年たつても関係ない。永遠なんです。永遠というのは時を超えています。我々は時間の観念の中で物事を考えますけれども、神さまの世界は絶えず現在です。向こうから迫ってくるのも現在に迫ってくる。過去が迫ってくるのも現在に對してです。常に現在、永遠の現在なんです。キリストの霊的人格というのは今もここに生きていてくださる。そして、永遠の現在として我々を生かしてください。キリストの言葉とはそういう言葉です。

● 山上の説教

まず、マタイの5章から、

「イエスはこの群衆を見て、山に登られた。腰を下ろされると、弟子たちが

近くに寄つて来た。そこで、イエスは口を開き、教えられた。

あらさが粗探しをする人は、

「口を開かないでは教えられないじゃないか」

なんて言う(笑)。「口を開き」というのは、「よほど大事なこと、重大なことをこれから語るよ」という意味です。「幸い」という見出しがついてます。ここで

「幸いである、幸いである」

と八つほどの祝福が並んでいるわけです、3節から10節まで。どういう人たちが「幸いだ」と言われているかということによく気をつけてほしい。決してこの世の地上的な意味で幸福な生活を送っている人、生活の諸条件に恵まれている人は対象にはなっていない。

3 「心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。

「心が貧しい」というのは、

「神さまの前に自分の心はからつぽです」

ということなんですよ。「あいつはきもしい人間やなあ。心がきたなく卑しい人やなあ」とか、そんな意味ではない。心がからつぽ、心が神さまの前にからつぽになっていることです。

「あなたの前に誇るべきものは何もありません。私はあなたの前には本当にからつぽの存在、飢え渴いたからつぽの存在です。どうぞあなたが入つて来てください」

と、そういうふうにからつぽなんです。あるいは別の言葉で言えば、神さまの前に平伏ひれふしていることです。似たような言葉に「謙遜けんそん」という言葉がありますね。キリストは、

「私は柔和で謙遜な者だから」

と言つておられる。あの謙遜けんそんというのも、神の前の謙へりくだり、別な言葉で言えば、神さまの前



に自分をサムシング(何ものか)にしていけないということ。神さまの前では、社会的地位なんというものは全然、問題にならない。この中にはいろんな立派な方がいらつしやいますけれども——社会ではそれを肩書かたがきと言います——肩書の前に頭を下げてくれるのであって、その人に頭を下げていないから、ご心配なく(笑)。肩書や地位を外れたら、もう誰も見向きもしません。神さまの前には肩書なんて問題にならない。その人の霊が本当にからっぽであるか、自己主張をしていないか。

「私はこんな立派な者です、だから認めてください」と、そうじゃないんです。

「私はあなたの前では全く何もありません。あなただけが拠より所です」と言っている、そういう心のすがた。これが「幸いだ」ということです。

「なぜなら、神さまが100%に入ってくるから。私はその例だ。私の姿はそうだ。あなたの方がそういう姿になったら、幸いなんだよ」

と、キリストは言っておられます。

4 悲しむ人々は、幸いである、その人たちは慰められる。

「私が慰めてあげるよ。悲しんでいる人は幸いである。なんとすれば、私が本当の悲しみを取り除き、慰めてあげるからね」

という、この言葉があるんです。だから、キリストは、

「笑っている人は災いだ」

と、別の福音書に書かれている。キリストを必要としないから。

「人からの慰めではなくて、本当に神さまからの慰めが欲しい人、その人は幸いなんだよ。私という天国体、これがあなたの慰めとなる。そして、逆転するからね」

と。つまり、天の次元から切り込んできて、天の次元から天の宝を引さっ提さげて、キリストは語りかけてくださっている。だから、その天の宝を受けとれる人はどういう魂の姿の人か。これは自分を何ものにもしていない。あるいは、非常に打ちひしがれて悲しんでいる人。この世の中には悲しいことがいっぱいありますよ。本当に悲しいですよ。しかし、

「その人は私から本当の慰めを受けとる。私と一つになれば永遠だよ。子供さんを亡くして悲しんでいる人。子供さんは今、天国で癒されています、天国で輝きますよ。すぐにそれを見ることが出来ますよ」

と。向こうの世界からこちらを抱きとって抱きしめてくれているのがキリストなんです。

「天にのぼった者は誰もいない。天からくだってきた者だけが、天のことを語れる」

と、キリストはヨハネ伝の中で言っておられる。だから、「天国」と言われているその霊界、輝く世界、その消息をキリストは100%持つて来てくださった。それを受けとったら、キリス

トと一つになったら、質的には我々は地上人でありながら天国人なんです。地上の人でありながら、既に天国の質をいただいて、天国の質がだんだん輝いてくる。老年になりますといよいよそうなります。この身体がぼろつと剥けますように肉体が亡びますと、サーツと向この世界へ行く。連続しているんです。

そのことをヒルティは「永遠の生命」と言っています。1908年に『幸福論』のあとに書いた論文が『永遠の生命』です。その論文はヒルティの集大成と言ってもいい。それから、1909年に書いたのが『力の秘密』です。それは神の愛について書かれています。これが人の中にしみ込むこと。これが最後のテーマとなりました。

「アモール オムニア ヴィンキット」(AMOR OMNIA VINCI)

「愛は一切に勝つ」

それを書いてすぐ向こうへ逝きました。でも、それを、皆さん、手にできなくても大丈夫です。『幸福論』の中に、ほとんどエッセンスが出てますから。また、それを集大成したのが、『永遠の生命』と『力の秘密』ですから。

〔註:『永遠の生命』と『力の秘密』の邦訳は、小池辰雄著作集第五巻『百世の師ヒルティ』(1977/8刊)に収録〕

このようなヒルティが書き明かそうとした向こうの世界の消息を身をもって現してください。それがキリストです。

⁵ 柔和な人々は、幸いである、その人たちは地を受け継ぐ。

キリストは柔和な人です。

⁶ 義に飢え渴く人々は、幸いである、その人たちは満たされる。

「義に飢え渴く人」、この義は神の義のことです。この世は不義が充満しています。それに対して本当の義を求める人は幸いだと。それから、

⁷ 憐れみ深い人々は、幸いである、その人たちは憐れみを受ける。

⁸ 心の清い人々は、幸いである、その人たちは神を見る。

みんなこれはキリストの姿です。我々がキリストの霊を受けますと、こういう姿に変えられていく。聖霊という方は我々を形造つてくださるんです、キリストと同じ姿に。ヒルティさんみたいに頑張らなくても、ちゃんと一人ひとりにやってくださる。だから、私の道は易行道、即ち易しい道です。修行の道ではない。先にキリストから頂いているんです。もらった慈しみの霊、聖霊、これが私をきちんとヒルティの望む姿に変えてくださる。

ヒルティは一生懸命、自助努力で走ってくれた、マラソン42キロをね。そしてゴールした。ゴールしてみたら、

「あれっ、奥田がおるではないか。どうしたの!？」

「聖霊が運んでくれたんですよ」



「しまった!」

とヒルティは言うかもしれない(笑)。でも本当にそうなんですよ。

。平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。

10義のために迫害される人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。」(マタイ5:1-10)

平和を実現する人々、義のために迫害される人々もそうです。

●敵を愛しなさい

それから、「敵を愛しなさい」という言葉が出てきます。

43 「あなたがたも聞いている通り、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。

44 しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。」

こんな「敵を愛する」なんてことはキリストしかできない。素晴らしいのは、キリストは神さまのことをどんなふうにつまえておられるか。恐い神さまとは見てない。キリストは、
45 ……父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる。

と。これをパリサイ人は嫌った。正しい者は天国へ、罪びとは地獄へ行く。そのために我々は努力している。それをイエスは宝もゴミも一緒くたにして天国へ連れていくと言う。

「入学試験撤廃なんてのはだめだ。厳しい試験をしろ。受験競争の世の中だよ」と言っているのがパリサイ人。それに対してキリストは親鸞と一緒にですよ。

「善人なおもて往生す。悪人においてをや」

と。善人は自分の善に依り頼んでいる。悪人は依り頼むものがないから、弥陀の本願にひたすら絶する。だから、「悪人正機だ」と言った。自分を善人と自覚したり、自分は義だと自覚するのは、キリストからは、

「ノー! その人たちには用がない」

と仰います。それに対して、

「私には救いがありません。何とかしてください!」

と言って、キリストのところへ絶つてくる者、それを無条件で受け入れる。無条件で受け入れると、優等生は怒るんですよ。

「落第生と優等生を一緒にするな!」

と言って怒るんですけれども。自分を落第生と自覚する人は幸いなんです。ルターもそうだった。ルターはカトリックで模範的な修道僧だと言われた。けれども、ルターの内面はもう戦々恐々、



「神は審判の神、恐ろしい神だ。私はこの義の神の前に立てない」と言つて、苦しんだ。その時にキリストの救いに縋るほかないという境地に來た。それで、「信仰のみ」

と言つた。その「信仰のみ」というのも、命懸けでキリストの救いに縋るといふ、「信仰のみ」であつて、安直なものでは絶対にありません。

⁴⁶自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるろうか。徴税人でも、同じことをしているではないか。

誰だつてそんなことはするではないかと。「徴税人」とか「異邦人」というのは、当時の宗教家が蔑んでいた人たちです。そういう人たちのことを思いながら、

「神さまの御思ひはそんなのではないよ」と言ふ。

⁴⁷自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになるろうか。異邦人でさえ、同じことをしているではないか。

我々もよくやりがちです。自分の友達や好きな人にニコニコ、ニコニコと近づく。そうでない人には、フンと遠ざかる(笑)。そうであつてはいけないということ。

⁴⁸だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」「(マタイ5・43〜48)

と。ヒルティはこれを生涯の課題として取り組んだ。私なんか、

「とんでもない。『神さまが完全なように完全になれ』なんて、こんな酷い掟はモ―セの律法よりも酷いではないですか」と言ふ。キリストはニコニコして、

「私がそうしてあげるから大丈夫だよ」

と。どんなキリストの言葉にも、「私がしてあげるから大丈夫だよ」という裏打ちがあり、これをつかんでなかつたら、成らないんですよ。「私がしてあげるから大丈夫!」というのが全部、言葉の奥に隠されている。

それなのにロシアの小説家トルストイとか真面目な人はやらなかつた。日本の明治時代のキリスト教徒はみんな「山上の垂訓」に躓いた。

「こんな厳しいものにはついていけない」

と。後に白樺派に参加した小説家有島武郎とか有名な文学者にたくさんキリスト教徒がおられたが、厳しすぎてついていけないと言つて、みな離れて行つた。亀井勝一郎もそうでした。亀井さんは親鸞のところへ行つた。みんな躓いた。

私を躓きから救ってくれたのが小池辰雄という出来損ないでした。神の前の出来損ない。「出来損ないだから救われる。出来損ないの奥に光っているキリストを見てくれ」



と、小池辰雄は叫んだ。

「天の父の全きごとく全くしてやるよ」

という、このキリストの約束。これに委ねていったんです。

ヒルティの場合はそうやって、キリストの言葉に直接にキリストを兄貴や先輩、モデルとして、「キリストに続け!」というわけです。「楽しい42キロのマラソンでございました」というような、そういう走り出しをしようとして、ヒルティは言ってくれた。

●人間存在そのものが罪

日本の多くの教会ではどう言ったか。

「過去の罪はみんな赦してあげる。だから、これからはもう罪を犯さないように。罪を犯したら、毎日悔い改めなさい」

と。これが、私を通していた教会の教えでした。過去は赦したが、今後はだめだよと。しかし、小池辰雄はどう言ったか、

「過去・現在・未来のすべての罪、そして存在そのものを根底から全部根こそぎ片付けた。十字架の贖いというものはそういうものだ」

と。もう本当に有り難かった。「過去は赦したから、これからは立派にやれ」と言われたら、毎日がしんどくてしょうがない。そして、

「世間の人があなただをクリスチャンとして見ています。あなたが躓けば神さまが嘲笑られるんです。あなたは証人なんだから、模範生となつて進まなくてはいいかん」

なんて言われると、もう外に出るのが嫌だった。みんなが私を見ていると思うと。しかも、「罪、罪」と言われると、もう窮屈なんです。ところが、小池辰雄は、

「存在そのものが罪だ。存在そのものが神に逆らっている。あの罪この罪とか、そんなものではない。自分の存在そのものが神さまに反逆している」

と言う。そういう烙印ちくいんを押されてしまったんですね、あのアダムとイブの振る舞い以来。キリストはどうか。

「父よ、あなたの御意を」

と。自分がどこかへいつてしまっている。そこが神の子なんです。人間でありながら、

「父よ、あなたの御意を。私ではありません」

と、すっかりからっぽになっている。我々はやはり「己おのれ」というものがある。

「ちよつとは己おのれも認めてよ。私だつてちよつとはいいところがあるんだから」

なんて言つて、生活を送っているわけです。つまり、自分を認めてほしい。自分がよくありたい。己を全部否定するのは気の毒なんです。

しかし、神さまという絶対の存在は絶対愛、無条件絶対の愛を貫き、善き者にも悪しき者



にも敵のためにも祈る。己というのが自分の中にはない。もし、皆さんがいま言ったようなことを手放しで言えたら、神の子ですわ。何も神の子と認められるのに制限はありませんから、何人だって神の子と認められていいんですよ。皆さん、それで、パーツと目覚めたらいい。「私は神の子です。キリストの言葉を全部、100%実践しています」

と。そう言って、「100%実践しています」と称える青年が聖書に登場したでしょ。

「私は十誠も律法も全部、小さい時からずうっと守ってきました。でも、心に喜びが、生命いのちがないんです。永遠の生命を嗣つぐにはどうしたらいいですか？
善き先生！」

と。このような富める青年の話がありますね。キリストは何と言ったか、

『善き先生』のその『善き』はやめてくれ。善き方は神さまだけだ。自分は何ものでもな！」

と。まず、その「善き先生」というその「善き」を除かれた。それから、

「十誠にいろいろ書いてあるよね」

「はい、小さい時からみなやってきたんです」

「そうか、素晴らしいね。しかし、一つ足りないものがある」

「はい、何でしょうか？」

「あなたは金持ちだね。その富を全部、貧しい人にあげてごらん。身軽になって、すつからかんになって、そして私の弟子となって一緒にっこうよ、これから。そしたら、絶対に天国だから、永遠の生命だからね」

とキリストは言われた。そうすると彼は悲しそうな顔をして立ち去った。キリストは慈しみの目をもってそれを見ておられたとあります。私が思うには、彼はあとから救われたと思う。「あの時は、立ち去りましたけれども、立ち去ったから、生命がくるわけがありません。あなたに継つがるしかないんです！」

と行って帰ってきたら、

「そうか、よく気がついたね」

「これからどうやって財産を売り払ったらいいですか。どこか競売やってくれるところがありませんか？」

「そんなことはいらん。そのままでもいい。己を惜しんでいることに気がついてたらしい。誰だって己が惜しい。このことが神さまと自分の間を妨げている。それに気付いたらいい」

「では、どうやったら、除のけていただけれるんですか？」

「人にできないことも、神にはできる。神にはどんなこともできるんだよ」

と、キリストは言われるはずですよ。ご自分の十字架ですね。これで全部、引き受けられた。

● 十字架の赦し

ヨハネ福音書に書かれている「姦淫の女」を赦されたのも、みなそうなんですよ。

「全部、私が引き受けるよ」

と。あのように無条件の赦しを与えていかれたのは、全部、「自分が引き受ける」という、裏打ちがあるからです。事実、本当に十字架の上でそれをなさった。

「父よ、彼らを赦してやってください」

と、敵のために祈られた。キリストこそ全く言葉、行為、祈り、すべてが一つです。全然、ずれがない。我々人間はそうならない。

「心配は要らん。私がそういう人間にあなたを造り変えてあげる。その造り変える

ために私は遣わされて来たんだから」

と。この地上でいろんなことを語り、また神さまの業を現した。五千人の人の飢えも一時的にいやしてあげた。でも、空振りだった。永続しなかった。だから、人間の背きという罪を全部背負って、十字架にかかってくださった。地獄まで行って、地獄で苦しんでいる霊たちを助けて、そして、あの霊体となって顕れてきた。この霊体はもうこの地上の有限な生命ではない。別次元の生命、高次の次元の霊体となって顕れてきた。それから、やがて天に昇られた。そして、聖霊という姿で帰って来られた。

聖霊というお方はキリストの分身だと私は思っています。天界に戻られた霊なるキリスト、霊的人格キリスト、そのお方の分身です。分霊と言ってもいい。ご自身の霊を惜しみなく我々に与えてくださる。五千人の人にパンを食べさせたところではない。五つのパンと二匹の魚。これをキリストは祈られた。祈って神に献げて、

「これは私の体だ」

と言って裂いて与えられた。男だけで五千人、女性と子供を入れたら一万人、それが食べ飽きて、なお残り屑が十二の籠かごに満ちたということが書かれている。そしてヨハネ伝では、

「あなた方は、そのパンを食べて満腹したから私の所へ来たのか。そうじゃない。生命のパンだ。あなた方は見えるパンに驚いた。しかし、見えないパン、本当の生命のパン、それは私自身だよ」

ということを言っておられる。

「私は生命のパンだ。私を本当に食べれば、あなた方は死なない。これが父の御意だよ。父の御意は、私の所へ来る者を私が一人も失わないで、終わりの時に甦よみがえらせる、これだ」

と。「終わりの時」というのは「今」なんですよ。「今、即刻」なんです。

「私を信ずる者は死んでも死なない。あなたはこれを信ずるか」

と、ラザロの復活のところでマルタに言われた。キリストにおいてはすべてのことが現在で



す。それを今もありありとここに現してください。そういう永遠の实在者、愛の霊、愛の権化ごんげです。こんな素晴らしい方がこの世の中におりますか。しかも、お金もかからずただいただける、何も要らん。無条件なんです。

●空気のように無条件

皆さん、空気を無意識のうち何の条件もなしに吸っておられますね。今、「空気」と言つて、初めて気がつかれたものではありませんか。

「あつ、空気を吸っているんだ」

と。寝ている時も吸っています。あのエベレスト山の高地あたりへ行ったら、空気は薄くて、とても息苦しいそうです。でも、この地上では、空気は無条件に吸ってられる。キリストの霊は地上に充滿している。どなたの中にも入りたいと思っておられる。それなのにバリヤー(障壁)を作つて入れないようにしているんです、人間は。自我という障壁を作つて、「入室お断り」と(笑)。私は、

「お入りください。主よ、お入りください!」

と、いつも開けています。聖霊を宿す家主さんです。聖霊は、

「賃料払おうか?」

「いえ、要りません。もうあなたが宿つてくださいるだけで、嬉うれしくてたまりません」

というのが、私の思いですわ。皆さん、どうですか。空気がしみ込んでくるように、そして空気が私たちを生かすように、聖霊が私たちを生かしてください。また、

「私は生命いのちの真清水まだ。この井戸から汲む水を飲んでもまた渴く。しかし、私を受けとったならば、渴かない。永遠の生命の水が湧き溢れるよ」

と言われた。みなリアリティーです。警話たとえばなしではない。本当にこれがリアリティーとして、

「本当にそうですね、主よ、あなたのお言葉は凄いですね」

と、こういう対話をしてください。それには少し雑音を除くためにテレビも消して、キリストと一対一で対話をしてください。

「本当に、主よ、凄いですね。あなたとの対話は愛の巣ですね」

と、キリストの言葉を生命の、愛の言葉として本当に受けとつていったら、変わつてきます。私は今日ここに来るにあたつて一期一会いちご一会と思つて来ました。来年、果して皆さんにお目にかかれるかどうか、誰もわからない。私の命もわからない。皆さんの命もわからない。地上の命とはそんなものですよ。地上の命は、みんな永遠にあるものと思つていけるけれども、いつ何が起ころかわからない。でも、いつどんなことに会おうと、どんなものに脅おびかされようと、びくともしない不動なるもの、これをキリストはくださる。これが本当の「人生の補強工事」ではありませんか。いついかなる時にも無条件に直ちに応じてくれる。キリストは



決して我々の地上の命を50歳まで保証するとは仰らなかつた。キリストご自身、33歳で召されたと言われています。まあ長くてもだいたい皆さん、120歳まででしょ。だから不老長寿なんて仰らない。

「この地上の命は仮の命だ、仮の世界だ。向こうに本ものがある」
と。しかし、仮の命を大事に御意に従つて本当に生き抜いた者だけが向こうに行くに価する。ヒルティがそのことを言っている。

「この地上の世界からスツと向こうへ行ける。この地上ででたらめなことをやっていた人間は向こうへ行く、死んだとたんに向こうへ行く、そんな不合理なことはありえようはずがない。キリストはあのような素晴らしいお方だから、復活せざるを得なかつた。永遠の生命となつて頭れざるを得なかつた。我々はキリストに導かれて同じような生き方をしたら、スツと行くよ」

と言つてくれた。私はさらに言います、

「聖霊という永遠の生命が皆さんの中に宿れば」

と。この方は「宿りたい、宿りたい」と言つておられる。ただで住まわせる。私たちはキリストに宿を提供する、お宿提供者です。そして、

「キリストの霊が宿つてくだされば、我々の死ぬべき身体をも生かしてください」

とパウロは言いました。そういう現実的なものを約束し実現して下さる方がキリストです。だから、私は叫んでいるんです。単なる哲学の講演とか、観念的な慰めだとか、そんなもののためだったら、私はここへ来ない。いつ何が起ころうと、皆さんと一期一会であろうと、この場が永遠の現在であるということですよ。

今日、皆さんがお聴きになつたこと、その他このプリントにまだまだたくさんの方の言葉を載せてありますが、これは本当に宝物、生命の宝です。これを皆さんがしっかり受けとつて、子々孫々に伝えてほしい。イスラエルの人たちは、ずっと子々孫々に伝えたんですよ、モーセの十誡からいろいろなものを取りそろえて。

「律法を首にくぐれ、柱に書け」

とか言いました。そうやってやはり子々孫々にこの生命の言葉を伝えていってほしいんです。日本には日本のやり方があっていい。ヨーロッパはヨーロッパのやり方でいきなさい。日本には日本の土壌があつて、民族性があります。そういう日本の土壌と民族性、この実に豊かな宗教的風土の中に本ものを植えて、それが見事な樹木となつて栄えていく。この役目を私たちが負っている。ここにいらつしやる皆さんお一人お一人がそうです。キリストは、

「石ころからでも神の子たちを起こす。この輩、黙せば、石叫ぶべし」

と言いました。決して優等生をキリストは招いておられない。ご縁があつて、こういう講演



会においでになった皆さん一人ひとり原石だ、磨けばダイヤモンドだと。いやもうダイヤモンドの方もたくさんいらつしやるけれども。そういうダイヤモンドもしくはダイヤモンド候補生がここにそろっておられるわけです。それが本当の人間の尊厳だと私は思っています。

●祈るときには

マタイ福音書6章に「祈るときには」というところがあります。

「……あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものを^ご存じなのだ。だから、こう祈りなさい。『天におられるわたしたちの父よ、御名が崇められますように。』⁹ 御国が来ますように。御心が行われますように、天におけるように地の上にも。』¹⁰ わたしたちに必要な糧を今日与えてください。』¹² わたしたちの負い目を救して^{ゆる}ください、わたしたちも自分に負い目のある人を救しましたように。』¹³ わたしたちを誘惑に遭わせず、悪い者から救ってください。』
という。この聖句も素晴らしいですよ。私たちは、

「これが足りません、あれが足りません。こうしてください、ああしてください」と、^ごちや^ごちやとたくさん悩みや願い事を持っている。神さまの方は、

「みんな、知っている。みんな、知っているよ」

「そんな、知っているんだったら、なぜ、祈るんですか？」

「会話したいじゃないの」

と。こういうわけです(笑)。夫婦でもそうですよ。

「あなたの言いたいことは、みなわかってるよ」

と。だから黙っているのではない。むっつり夫婦だったら、気まずいですよね。子供の場合だってそうですよ。わかっていることをお互いに確認し合いながらコミュニケーションできるとというのが、私と孫との間柄なんです。

こういう言葉もキリストが我々に直接、語ってくださいっている。いやもう、キリストが我々に言葉をかけてくれるというだけでも感激です。

皆さん、天皇陛下からお言葉をかけられたことがありますか？ まずないでしょうね。やはり、嬉しいし、感激します。それと似たようなもんです。キリストから直接、言葉をかけてもらったなら、どんなに嬉しいか。皆さんに毎日毎日、キリストは語ってくださいっているんです。本当に語りかけて、肩に手をおきながら、

「大丈夫だよ、大丈夫だよ」

と。私はさきほど述べた「心の貧しい人は……」以下のプリントしてある所を、昨日もホテルでずっと読んでいたけれども、読んでいるうちに涙が出てきますね、ありがたくて。

「ああ、こんなふうに語りかけてくださっているんだ」



と。「今」現在なんですよ。「昔、昔、主はかく言い給えり」ではない。論語だったら、「子曰く……」だけれども(笑)。今現在、あなたに向かつて、このように語りかけている。キリストがそばに居てくださる。そういう思いで受けとってほしいんです。この中で、

「わたしたちに必要な糧を今日与えてください」

と言いながら、「赦し」のことがたくさん出てきている。いかに人間は人を赦すことが難しいかということキリストはご存知なんですよ。

「敵のために祈れ。迫害する者のために祈れ」

この言葉もそうでしたね。

「わたしたちの負い目を赦してください、わたしたちも自分に負い目のある人を赦しましたように。」

と。「赦しましたように」というのが先に出るんですよ。

「赦したから、私の負い目も赦してね」

とこうくる。だから、赦していなかったら、願えないです。これは法律学の用語では、「同時履行の抗弁権」とかいって、要するに「引換給付」でいきましようということですよ。

「あなたが払ってないから、私も払わないよ」

というのが法律の世界、経済の世界のルールなんです。ところが、神さまの方は、

14 もし、人の過ちを赦すなら、あなた方の天の父も過ちをお赦しになる。15 し

かし、赦さないなら父もあなた方の過ちをお赦しにならない。」(マタイ6:8、15)

と。さらにだめ押しをしておられる。これはきついですよね。どうしたらいいですか。

「赦せません、助けてください!」

と願うことです。「こうしなさい」と言われて、できなければ、パイと横を向くのではなくて、

「できません。お助けください。赦せるような心をください!」

「そうだよな、赦しなんてできないよな。憎つたらしいあいつの顔を思い浮かべるだけでも嫌だものな」

と(笑)。そうでしょ、人間というのは。でも、それを乗り越えて、

「私の所へ来てごらん。私と一つになつてごらん。私から赦しの心が流れていくから。」

私の霊は赦しの霊、愛の霊だから」

「はっ、そうですか。そうなんですね」

「そうだよ」と。人にできないことを神がなさる。人ができるなら神さまは要らん。そうでしょ。私はあのラザロの復活のところでも思うんですよ。ラザロは墓に葬られて四日も経っていたでしょ。キリストは何と言われたか。

「石を除けなさい」



と言われた。石を除けるといふのは、力もちで除けられますよ。それから、

「ラザロよ、出てこい！」

と。この「ラザロよ、出てこい」はキリストしか言えない。石を除けるのは我々人間でもできるんです、協力すれば。だから、私は自分の信仰生活を振り返り、どこまでが自分で石を除けることか、即ち自分でやるべきことなのか、どこからがキリストの出番なのか。そのことをやはり思います。コーヒー飲んだりお茶を飲むのにいちいち、「神さま、飲ましてください」なんて(笑)、そんなことを言う必要はないでしょ。でも、どうしても自力でできないことに出会ったら、たじろがないで、

「あつ、これはできない。ここから、主よ、あなたの出番です。助けてください」と。子供だってそうです。

「やれることはやってごらん。それでやれないことはおじいちゃんがついているから大丈夫だよ」

というわけです。そういうふうには私は思っています。ですから、

「赦しは難しい。でも、主よ、あなたの霊が私のうちに宿れば、いつしか私もあなたと同じように赦せる人間になると信じております。だから、さしあたり、仮出獄させてください」

というわけですね。

●天に富を積みなさい

次に、「天に富を積みなさい」と、これもなかなか大変なんですね。

「¹⁹「あなたがたは地上に富を積んではならない。そこでは、虫が食ったり、さび付いたりするし、また、盗人が忍び込んで盗み出したりする。」

確かに地上は宝を置くのにちよつと不便な所です。銀行に預ければ、銀行がつぶれるし(笑)、証券を買えば、証券がだめになるしね。キリストは、

「だから、天に宝を貯えなさいと言っただろ」

と、今ごろニコニコしておられますよ。「天に積む宝」とは何ですか？ お金は天に積みません。我々の愛の行いです。愛の行為^{おこない}。神さまは自分のためには何も求めておられない。

「神の心をもつて人に仕えなさい。人を助けなさい」

と。神さまは貧乏ではないから、神はくださる方^{ほう}ですよ。くださる方ですから、豊かな生命をいただき豊かな力をいただく。力がなければ人助けもできない。それでもつて人に仕えなさいと。これは御意^{みこころ}です。人に仕える姿にはいろんな姿があり、何も現実の行いではなくても祈りだっていい。誰かのために一生懸命に祈るといふ、それだっていい。とにかく、神さまが喜んでくださるような在り方、これが「天に宝を積む」という姿だと私は思っています。



20 富は、天に積みなさい。そこでは、虫が食うことも、さび付くこともなく、また、盗人が忍び込むことも盗み出すこともない。21 あなたの富のあるところに、あなたの心もあるのだ。」(マタイ6・19〜21)

「あなたの宝のあるところに心もある」という。皆さんの心はどこにありますか、宝は何ですか。「天の宝」というところに目を向ける人は幸いだと思います。

●体のともし火は目

次に、「体のともし火は目」。

「22 体のともし火は目である。目が澄んでいれば、あなたの全身が明るい。23 濁ってれば、全身が暗い。だから、あなたの中にある光が消えれば、その暗さはどれほどであろう。」

「あなたのうちなる光が消えていけば、あなたは実は暗いんだよ」と。「中なる光」とは聖霊なんです。キリストの霊です。

「あなた方は世の光である。なんとなれば、私があるあなたの中に宿って光るから。24 虫を羨ましがらなくてもいい。あなた自身が発光体だよ」

と言われた。キリストという霊がうちに宿ってくださると、光を放つ。灯火になる。

24 「だれも、二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」

それから、「思い悩むな」と言う。

25 「だから、言っておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。26 空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。

羨ましいですね、「働かんでいい」と言う。キリストは怠け者を奨励しているんでしょうかと。

種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか。

27 あなたがたのうちだれが、思い悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。28 なぜ、衣服のことで思い悩むのか。野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。29 しかし、言っておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。30 今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではな



いか、信仰の薄い者たちよ。」(マタイ6・22〜30)

野の草は枯れば火に投げ入れられて焼かれてしまう。でも、このように素晴らしく咲いているのは、太陽の光、空気、水、そういった自然の恵みをいっぱい受けて、咲いているわけです。自分ひとりで咲いていません。恵みの中で咲いています。

「あなた方はこれよりもっと素晴らしいよ」

と、キリストは言ってくれました。要するに、ここでキリストが言っておられることは、自然を見てごらんと。「自ずと然り^{おの}」ではないですか、「自然」というのは。自ずと然りの姿で、それぞれの様でいる。そしてちゃんと神は守って榮えさせてくださっている。

「あなた方はもつともつと素晴らしい存在なんだ。神の生命を受けるに相応^{ふさわ}しい人たちなんだよ。それが思い悩んで、うつむいていたら、どうするんだ。胸を張って、天を仰いで行こうではないか。身体のこと、生命のこと、神さまがちゃんと必要なものはご存知なんだから。必要なものはすべて祈る前からご存知だ」

と。祈る前からご存知だ。だから本当に必要なものは、「必要なんです、ください!」と言えば——というルート(経路)で来るか知りませんよ——でも、備えられるよと。キリストが約束されたことは必ず成就します。

今は世界の経済が大変でしょ、チャンスですね。もう一度、キリストの言葉に帰ろうよと。マネーゲームで何か変なことになるってしまった。その罪は誰が背負うのか知りませんけれども。もう一度、原点に帰って、キリストの言葉に皆が立ち向かって考えようよと。

「神と富とに兼ね仕えることはできない」

と、キリストは言われたのに、世界の人々は富にばかり仕えてきた。その刈り取る実は、今の経済の状況ではないかな。私は経済のことはわからない人間だから、こんな勝手なことを言うけれども。経済の専門家だったら、それなりに言い分があるのだろうと思いますが。

やはり、原点は何かというと、素朴に神を信頼し、自然を大切にし、そしてお互いに助け合い、相通じあつて生活していくということではないでしょうか。何かが必要であつたら、森林を伐採して耕地を広げ、大豆を植えてみたり、やたらと森林伐採して金に換えてみたりとか、人間は地球を壊^{こわ}しまくってきた。そう思いますね。あるいは放射能がこちらにばらまかれたり、全部、人のなせるわざです。

「同じ人間の行^{おこな}ったことなんですか?」

と云いたくなります。全部、人間の仕業^{しわざ}なんです。人間がやってきたことです。ところが、神さまへは帰ろうとしない。政治家は適当に宗教を利用します。それが選挙に有利だと思つたら、宗教を利用するように私には映ります。本気で命懸けで神の国のことを思つて、政治をやってくれたらいいんだけど、それは無理なかもわかりませんが。

けれども、キリストがここで取り上げたように語ってくださっている言葉に、皆さん、立



ち返ってほしいと私は願っています。

「³¹だから、『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と言って、思い悩むな。³²それはみな、異邦人が切に求めているものだ。

「異邦人」というのは「神さまを知らない人たち」と受けとつてください。本当に神さまのことを知らない人たち。私なんかも異邦人だったわけです。実際、「何を食べようか、何を飲もうか」という将来のことで思い煩っておりました。将来の自分の生活、家族の生活、それらを全部、自分で背負い込むような気持ちでおりました。ところが、

「キリストの所に来たら、あなた方は何も心配いらんよ」という。

あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。³³何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。³⁴だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である。」

(マタイ6・31～34)

「明日のことを思い煩うな。一日の苦労は一日で十分だ」と。この言葉は有り難いですよ。みんな、明日のこと、明後日のこと、将来のことを一生懸命に考えて、悩むんです。それでのための保険制度とかいろんなのがあっても、それは人間の社会制度としては必要なのでしよう。けれども、基本的には、

「二日、今日一日を、主よ、あなたの守りの中に、導きの中にお守りください」

という、そういう気持ちで一日一日を生きていく。その積み重ねが大事ではないでしょうか。

●求めなさい

次は「求めなさい」ということ。7章です。

⁷「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つける。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。」

「何でも求めたらいい」と言うんです。「本当にこれは絶対に欲しい」と思ったら、

「求めなさい、そしたら与えられる。探しなさい、そしたら見つかる」というのがキリストの約束ですよ。

。だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。

。あなたがたのだけれが、パンを欲しがる自分の子供に、石を与えるだろうか。

¹⁰魚を欲しがるのに、蛇を与えるだろうか。

「石」というのは軽石のようなものでパンと似ていたようです。それから蛇とか蠍さそりというのが長い魚やエビと似ていた。似て非なるものです。似たものを与えて誤魔化したりはしない。



11「このように、あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。

と。ぐざりときませんか? 「あなた方は悪い者である」という。そうです。

「こんな悪者でもなあ、子供にはちゃんとやってやっているや! 子供には、違うことをしているんだよ」

と言うのが人間性です。この頃はなかなかそうではなくなってきましたけれども(笑)。本当はそうなんですよ。自分はひもじくても、子供にはちゃんとしてやりたい。

まして、あなたがたの天の父は、求める者に良い物をくださるにちがいない。」「(マタイ7・7〜11)

「ましてや、あなた方は神さまの愛する子供ではないか。神さまが放っておくはずがないよ。だから、信頼しなさい」という。

●狭い門

次に、「狭い門」。

13「狭い門から入りなさい。滅びに通じる門は広く、その道も広々として、そこから入る者が多い。14しかし、命に通じる門はなんと狭く、その道も細いことか。それを見いだす者は少ない。」「(マタイ7・13〜14)

それでは、いったい誰が救われるのでしょうか。「みんなで渡れば恐くない」と言つて、赤信号を渡るといふのは困りますよ。「みんなで渡れば恐くない。一人ではなかなかやれません」と言うんだけど、ここでは、

「命に通じる門はなんと狭く細いことか。それを見いだす者は少ない」

と。では、どういう人が命に通じる門を見いだすのだろうか。さきほど述べた「山上の垂訓」のところと同じです。自分は惨めだと自覚する人、自分がこのままではどうにもならないというふうに分の欠乏を自覚する人。絶望とまでは言いませんけれども、差し迫っていると感じている人。そういう人が福音に近いんです。

●私のもとに来なさい

次の言葉を見てください。「私のもとに来なさい」という、11章です。

25「そのとき、イエスはこう言われた。「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子おきなのような者にお示しになりました。26「そうです、父よ、これは御心かなにおきな適うことでした。27

すべてのことは、父からわたしに任せられています。父のほかに子を知る者はなく、子と、子が示そうと思う者のほかに、父を知る者はいません。28「疲



れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。

この言葉ですよ。

²⁹わたしは柔和で謙遜な者だから、からっぽだから、神の前に平伏ひれふしだから、

わたしの軛くびきを負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。³⁰わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。』(マタイ11・25〜30)

これは慰めに満ちた言葉ですよ、本当に。へばった時に、もうだめだと思いう時に、「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとにいらつしやい」

と、この言葉に出会ったら、本当に砂漠でオアシスにたどり着いたという思いがします。

●最も重要な掟は何ですか

次にマルコ福音書のところ、「最も重要な掟は何ですか」という問答です。12章です。

「²⁸彼らの議論を聞いていた一人の律法学者が進み出、イエスが立派にお答えになったのを見て、尋ねた。「あらゆる掟おきてのうちで、どれが第一でしょうか。」

²⁹イエスはお答えになった。「第一の掟は、これである。『イスラエルよ、聞け、わたしたちの神である主は、唯一の主である。³⁰心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』³¹第二の掟は、これである。『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つにまさる掟はほかにない。」

キリストという方はこの通りなことをなさいました。全存在で神に従いきられた。神を愛するということは御言みことばに従うこと。その御思みいのとおりに生きることが「愛する」ということ。

³²律法学者はイエスに言った。「先生、おっしゃるとおりです。『神は唯一である。ほかに神はない』とおっしゃったのは、本当です。³³そして、『心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして神を愛し、また隣人を自分のように愛する』ということは、どんな焼き尽くす献げ物やいけにえよりも優れています。』³⁴イエスは律法学者が適切な答えをしたのを見て、「あなたは、神の国から遠くない」と言われた。」(マルコ12・28〜34)

「そのとおりだ、あなたは神の国に近いよ」と。

ここまででは、いわゆる共観福音書の中の代表としてのマタイ福音書とマルコ福音書からのキリストの言葉を引いてきました。



●永遠の生命

次は、ヨハネ福音書の第二楽章にいけます。ここでは「永遠の生命」をずばり語ってくれています。日本人にとって非常に親しみやすい。私はそう思います。

「神は審きの神である。恐い神である」
という観念は一掃されます。

「神は慈しみの神である、愛の神である、己を与えてやまない神である」という、「愛」というのは与える愛です。ご自身を与えてやまない。それが父の御意なんです。これをしつかり受けとっていただきたい。3章です。

「¹⁶神は、その独り子をお与えになつたほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。¹⁷神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。¹⁸御子を信じる者は裁かれぬ。信じない者は既に裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである。¹⁹光が世に來たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。それが、もう裁きになっている。²⁰悪を行う者は皆、光を憎み、その行いが明るみに出されるのを恐れて、光の方に来ないからである。²¹しかし、真理を行う者は光の方に来る。その行いが神に導かれてなされたということが、明らかになるために。」(ヨハネ3・16〜21)

神さまは裁こうとなさっていない。「光が來た、これが救いだよ」と言つて、やつて來たのに、それを「要りません!」と言つて、衝立を立てて拒絶している。それではどうしようもないではないですかと、こういう単純な話です。その次、5章にいけます。

「¹⁹そこで、イエスは彼らに言われた。「はつきり言つておく。子は、父のなさることを見なければ、自らは何事もできない。父がなさることはなんでも、子もそのとおりにする。」

「自分は何もできないよ。父のなさることを見なければ、自分からは何事もできない。父がなさることは何でもそのとおりする。ちゃんとお示しくださるから」と言つておられる。

²⁰父は子を愛して、御自分のなさることをすべて子に示されるからである。また、これらのことよりも大きな業を子にお示しになって、あなたたちが驚くことになる。²¹すなわち、父が死者を復活させて命をお与えになるように、子も、与えたいと思う者に命を与える。

我々が一番欲しいものは永遠の生命、これを与える。

²²また、父はだれをも裁かず、裁きは一切子に任せておられる。

裁きはキリストが引きとつてくださる。

²³すべての人が、父を敬うように、子をも敬うようになるためである。子を敬



われない者は、子をお遣わしになった父をも敬わない。

これが大事なんですね。「神さま、神さま」と言って、キリストをそつちのけにしたらいけない。まずキリストを通して、父なる神さまのところへ行く。

「**我は道なり、真理なり、生命なり。私を通らなければ、父には行けない**」

とキリストは仰った。私はそれが有り難い。キリストの中へ抱きとられれば、その向こうに父がいてくださる。父なる神はキリストを抱きとっておられる。そのキリストが門を開いてくだされば、そこへ飛び込んでいけば、そこにちゃんと父も一緒にいてくださる。

「**私を見た者は父を見たんだ。父と私は一つだよ**」

と言われた。キリストを二の次にしてはいけません。教会の祈りも、私はそうあるべきだと思うんです。「天にまします我らの父よ……」と、父なる神のことを祈って、最後に「イエス・キリストの御名みなによつて」と、イエス・キリストの御名が最後にちよこんと出てくる。私は、これも小池辰雄先生から教わったんです。

「主イエス・キリストさま、主さまー」

と祈る。イエスは「父よ」と直接呼ばれた。イエスは父の懐へ飛び込んでいかれた。神さまの前にキリストが立ちはだかつて——邪魔するのではなくて——私たちに門を開いて、

「さあおいでー」

と言つてくださる。だから、

「主よ、主さま、主キリストさまー」

と。「主キリストさま」と祈れば、背後にいる父は、「うむ、うむ、聞いているぞ」という、そういう感じなんです。親しみやすい、「主イエス・キリストさま」というのは。さきほど述べた讚美歌に、「いつくしみ深き友なるイエスよ」とあつたでしょ。イエス・キリストの背後に父なる神がいてくださる。そういう関係ですので、「イエス・キリストの御名によつて」と、最後に御名がほんのちよつと出てくるのは、私はあまりしつくりこない。

²⁴はつきり言つておく。わたしの言葉を聞いて、わたしをお遣わしになった方を信じる者は、永遠の命を得、また、裁かれることなく、死から命へと移っている。

死から命へと移っているんです、もう既に。

²⁵はつきり言つておく。死んだ者が神の子の声を聞く時が来る。今やその時である。

皆さんはどうですか？ 私はキリストに出会うまで死んだ者でした。自分の中に生命があると自覚しなかった。

「私は死に至る人間だ。どんなにこの世でいろいろ幸せなことがあっても、結局、自分は死んでいく人間だ。また愛する者もいつか死んでいく。いや、いつかどこ



ろか、明日にも死ぬかも知れない。人間はそういう儂い^{はかな}存在だ」

と。そしたら、喜ばなかった。何があっても本当に心から喜ばなかった。ところが、世間の人はいんなニコニコ、ニコニコと楽しそうに過ごしているので、私は「不思議だなあ。これは私が病気ではなからうか？」と思った。精神科へ行ったら、「病気がありませんよ、あなたは真面目^{まじめ}すぎるんですよ、もう少しルーズに（おおらかに）なりなさい」と言われた。真面目に考えたら、そうでしょ。ところが、キリストは、

「死んだ者が神の子の声を聞く時が来る。今やその時である。その声を聞いた者は生きる」

と仰った。私はキリストの御声によつて生きた。同じ肉体の持ち主でありながら、同じ自然的な生命の持ち主でありながら、キリストの霊とキリストの生命が宿った。具体的には聖霊という姿で宿ってくださる、初めはよくわからなかったけれども。とにかく、キリストというお方に触れたことによつて私は生きた。生きているという実感が湧いてきた。でも、その「生きた」という実感はあつてもこれからどうやって本当に神の子らしい、キリスト信者らしい、褒めていただけのような本当のクリスチャンになれるのか、それが心配でした。いرونなことがありました。けれどもとにかく死というものの恐怖は消えた。本当にそうです。ですから、ヨハネ伝は、これから先の話、何千年も墓に眠っていたものが不意に眠りから甦るとい話ではない。今現在のことです。すべては今です。永遠の現在です。死んだようにな私が御子キリストの御声に触れて生きましたということ。今、生きています。

²⁶父は、御自身の内に命を持っておられるように、子「イエス・キリスト」にも自分の内に命を持つようになしてください。だからである。

「その生命を与えよう」と言っておられる。

²⁷また、裁きを行う権能を子にお与えになった。子は人の子だからである。²⁸驚いてはならない。時が来ると、墓の中にいる者は皆、人の子の声を聞き、

ご自分のことを「人の子」と仰っている。私の声を聞き、²⁹善を行った者は復活して命を受けるために、悪を行った者は復活して裁きを受けるために出て来るのだ。

またこんな時もあるでしょうね。とにかく、我々は「今、現在」です。

³⁰わたしは自分では何もできない。ただ、父から聞くままに裁く。わたしの裁きは正しい。わたしは自分の意志ではなく、わたしをお遣わしになった方の御心を行おうとするからである。」(ヨハネ5・19〜30)

「裁き」というのは、「判断」という意味でもある。「白か、黒か」と裁きを、判断するということ。判断を誤らないために——裁判官の方々はいつも苦勞なさいている。裁判員になれば皆さんも苦勞なさいます——判断を誤まらないためにはまず己から私的な感情がなくな



らないといけない。だから、自分に関わりの深い事案の場合、裁判から外される。利害関係のあるものは外されます。それもそうなんです。でも、学問においても、裁判においても、どんなことにおいても、正しい判断を行うには、自分というものから外れていないといけない。御意^{みこころ}だけを求めて、「あなたの判断で判断させてください」と。私は学問する時にも、「主よ、あなたの澄みとおった目で物事を見させてください」と。そういう祈りで取り組んできました。キリスト信者になってからは、大したことは何もしてないけれども、それだけの一念でやってきました。

「物事を正しく見させてください。正しい判断を与えてください」と、それだけでした。裁判官になってからでもそうでした。

●イエスは命のパン

次に、6章にいけます。五千人の人たちを五つのパンと二匹の魚で養われた。その後の出来事です。「イエスは命のパン」のところす。

「²²その翌日、湖の向こう岸に残っていた群衆は、……³⁴そこで、彼らが、「主よ、そのパンをいつもわたしたちにください」と言うと、³⁵イエスは言われた。「わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない。³⁶しかし、前にも言ったように、あなたがたはわたしを見ていないのに、信じない。³⁷父がわたしにお与えになる人は皆、わたしのもとに来る。わたしのもとに来る人を、わたしは決して追い出さない〔拒まない〕。³⁸わたしが天から降^{くだ}って来たのは、自分の意志を行うためではなく、わたしをお遣わしになった方の御心を行うためである。³⁹わたしをお遣わしになった方の御心とは、わたしに与えてくださった人を」

私のところへ救いを求めて来る人、生命を求めて来る人、そういう人を、一人も失わないで、終わりの日に復活させることである。

この「終わりの日」というのは「今」ですから。

⁴⁰わたしの父の御心は、子を見て信じる者が皆永遠の命を得ることであり、わたしがその人を終わりの日に復活させることだからである。」(ヨハネ6:22)

この点はヒルティも、

「この終わりの日は遠い日ではなくて、今だ」ということをはつきり言っています。

「現世においてこの復活の生命、キリストが賜^{たまわ}られたと同じ復活の生命にあずかっていなくて、どうして向こうの世界へ行けるんですか」



とはつきり言ってます。それから次の10章25節にいきます。

「²⁵イエスは答えられた。「わたしは言ったが、あなたたちは信じない。わたしが父の名によって行う業が、わたしについて証しをしている。²⁶しかし、あなたたちは信じない。わたしの羊ではないからである。²⁷わたしの羊はわたしの声を聞き分ける。わたしは彼らを知っており、彼らはわたしに従う。²⁸わたしは彼らに永遠の命を与える。彼らは決して滅びず、だれも彼らをわたしの手から奪うことはできない。²⁹わたしの父がわたしにくださったものは、すべてのもものより偉大であり、だれも父の手から奪うことはできない。³⁰わたしと父とは一つである。」(ヨハネ10・25〜30)

さきほど取り上げた讚美歌「^{かいぬし} 牧主わが主よ」はこの10章を歌っています。

それから、「ラザロの復活」のことが出ています。11章です。

「²⁵イエスは言われた。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。²⁶生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」(ヨハネ11・25〜26)

と言われた。「はい、そのとおりです!」と、もう今だったら、皆さん、お答えになれますよね、「はい、そのとおりです」と。

●新しい掟

それから、13章にいきます。今度は「新しい掟」。さつき、

「心を尽くし精神を尽くして神を愛することと、己の如く隣人を愛すること、これが旧約における最大の誠命だ」

ということをキリストは言われたけれども、キリストがこの世を去られるにあたって、

「私があなた方を愛したように、あなた方も互いに愛し合いなさい。これが私の与える新しい掟である。ただ一つの掟である」

「³⁴あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。³⁵互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる。」(ヨハネ13・34〜35)

ということを言われた。見えない神さま、見えないキリストを誰が表すのか? クリスチャン、キリストの弟子どもです。キリストの弟子どもの姿がキリストと同じような愛の姿であるならば——人に尽くし兄弟姉妹、信者同士互いに愛し合っている——その姿に天国が現れている。それで初めて、「天国が近い」ということが皆さんにわかっていただけるわけですよ。



●イエスは父に至る道

その次に14章。ここは聖霊のことを言っておられる。

「今から天国に場所を用意して、用意ができたらまた帰ってくるからね」

と、そういうことを言われて、「どこへ行くのかわかっているだろう」と。それに対して、

「⁵トマスが言った。「主よ、どこへ行かれるのか、わたしたちにはわかりません。」

どうして、その道を知ることができるでしょうか。」

それに対して有名な言葉、

⁶イエスは言われた。「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない。⁷あなたがたがわたしを知っているなら、わたしの父をも知ることになる。今から、あなたがたは

父を知る。いや、既に父を見ている。」

「もう知っているだろう」と言われた。「いえいえ、とんでもない。わかりません。父を示してください！」と、今度はフィリポが言い出した。

⁸フィリポが「主よ、わたしたちに御父をお示してください。そうすれば満足できます」と言うと、⁹イエスは言われた。「フィリポ、こんなに長い間一緒にいるのに、わたしがわかっていないのか。わたしを見た者は、父を見たのだ。なぜ、『わたしたちに御父をお示してください』と言うのか。」

「一緒に長いこといってまだわからないの？ 私を見た者は父を見たんだよ。何を見てたの!?!」というふう言われた。聖霊が来なければわからないそうです。聖霊がキリストをお示しくださる。だから、これは無理もないんですよ、弟子どもは。聖霊がまだ来てませんから。肉の目では見えない。そこで、「私を見た者は父を見たのだ」と仰って、

¹⁰わたしが父の内におり、父がわたしの内におられることを、信じないのか。わたしがあなたがたに言う言葉は、自ら話しているのではない。わたしの内におられる父が、その業^{わざ}を行っておられるのである。¹¹わたしが父の内におり、父がわたしの内におられると、わたしが言うのを信じなさい。もしそれを信じないなら、業そのものによって信じなさい。¹²はつきり言っておく。わたしを信じる者は、わたしが行う業を行い、また、もっと大きな業を行うようになる。わたしが父のもとへ行くからである。¹³わたしの名によって願うことは、何でもかなえてあげよう。こうして、父は子によって栄光をお受けになる。¹⁴わたしの名によって何かを願うならば、わたしがかなえてあげよう。」(ヨハネ

14・5〜14)

そういう約束まで弟子にしておられる。約束は弟子どもにしておられるから、自分には関係ないと思わないでください。我々は弟子なんですから。我々はみんな弟子ですよ。「弟子の



試験はあるんですか?」なんて。いやもう、押しかけ弟子ですよ。自分で弟子入りした。

● 聖霊を与える約束

次が、「聖霊を与える約束」。このことは絶対、皆さん、受けとっていただきたい。

「15 「あなたがたは、わたしを愛しているならば、わたしの掟おきてを守る。」

「愛する」ということは、「言葉を守る」ということ。その人が最も大事にしている言葉を大事にするということが、その人を愛するということでしょう。そのことを言っていらいっしょやる。

16 わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてください。

「弁護士」という訳語は嫌いですね、昔の文語訳聖書には「助主たすけぬし」と書いてある。助け主、私はそのほうが好きです、弁護士の先生には申し訳ないけれども。この言葉は「パラクレートス」といつて原語的には「弁護士」という意味だそうです。要するに、守って助けてくださる方。かたこれを遣わして、永遠にあなた方と一緒にいらせてくださるんだと。しかも、

17 この方は真理の霊である。世は、この霊を見ようとも知ろうともしないので、受け入れることができない。しかし、あなたがたはこの霊を知っている。本当は知らないですけども、知っているはずだよと。

この霊があなたがたと共におり、これからも、あなたがたの内にいるからである。
ある。

「あなた方の内に宿りたもうお方だからである」と、先取りして言っておられる。

18 わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない。あなたがたのところに戻って来る。

聖霊という姿で帰ってくる。そうしたら、永久に永遠にいつも一緒だよと。父なる神さまと私とあなたたちの中にいる聖霊といつも一緒。「三位一体さんみ」という。「父・御子・御霊」それから我々人間の四者は四位一体よんみなんです。これが本当の生命の世界、本当の救いだよと言う。

19 しばらくすると、世はもうわたしを見なくなるが、あなたがたはわたしを見る。わたしが生きていますので、あなたがたも生きることになる。20 かの日には、わたしが父の内におり、あなたがたがわたしの内におり、わたしもあなたがたの内におることが、あなたがたにわかる。

そのほかにもいろいろ言っておられますが、要するに、「私を愛する人は私の言葉を守る」ということが大事です。23節、繰り返します。

23 イエスはこう答えて言われた。「わたしを愛する人は、わたしの言葉を守る。」

わたしの父はその人を愛され、父とわたしとはその人のところに行き、一緒に住む。24 わたしを愛さない者は、わたしの言葉を守らない。あなたがたが聞



いている言葉はわたしのものではなく、わたしをお遣わしになった父のものである。……²⁶しかし、弁護士、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。

聖霊という助主^{たすけぬし}、真理の御霊^{みたま}が来たならば、あなた方にすべてのことを教えてくださる。今までいろんなことを語ってきた、それを全部思い起こさせてくださる。しかも、心に平安が宿るから、恐れがなくなる。平安が宿る。その平安というのはこの世のものではないと。

²⁷わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない。心を騒がせるな。おびえるな。」(ヨハネ 14・15〜27)

それから15章は、「葡萄の木と枝」というところです。

「私は葡萄の木、父は農夫。私のこの葡萄の木にしっかりと繋がっていたら、くらいついていたら、絶対に実を結ぶから。枝は本体から離れたら、何もできないよ」

と、そういうことを言われた。そして、

「私の中にある喜びがあなたの方の中に充満するように」

「¹⁰わたしが父の掟^{おきて}を守り、その愛にとどまっているように、あなたがたも、わたしの掟を守るなら、わたしの愛にとどまっていることになる。」¹¹これらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたの内にあり、あなたがたの喜びが満たされるためである。¹²わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。」(ヨハネ15・10〜12)

と言ってくださっています。駆け足でしたけれどもヨハネ福音書のことはいままでとします。

●パウロのローマ書

では、最後の第三楽章にあたるパウロのところに行きます。パウロはとても理屈っぽい人で、イエス・キリストの救いの実体を神学的に語ってくれました。しかし、パウロの言おうとすることは、我々日本人には簡単なことです。パウロはユダヤ人を相手にして神学を展開していますので、大変なんです。「律法と福音との関係」を述べるようになりますから。我々日本人には「律法」というのはあまり関係がありません。

むしろ、我々日本人の過去の宗教風土との関わりが重要です。さつきから申しましたように日本には八百万^{やおよろず}の神々がおり、また様々な宗教的、道徳的風土がありました。そうした風土の中で我々は育^{はぐ}まれた。そういう我々日本人がずっと育てられてきた風土というものとキリストの福音、これとはどういう関わりを持つか。そういう角度で捉^{とら}えていただければいい。



一言で言いますと、パウロがローマ書の中で「肉」と言っているのは、自己中心の在り方のことで、人間の生まれながらの在り方、自己中心の在り方、これを「肉」と言っている。他方、「霊」というのは何かというと、神中心の在り方、キリストの生き方です。キリストの在り方、これを「霊」と言っています。

パウロは、せつかくユダヤ人がモーセを通して、あの尊い律法を賜ったのに、人間の根性が曲がっているために、尊い律法をねじ曲げて、「己が肉の思いで神の前に義であろうとした。己を高しとし、己によって栄冠を勝ち取ろうとした。このことが実は間違っていた。そうではなくて、別の道がキリストによって示された。これは「福音の道」、信ずる者すべてに与え給う神の義であると。「別の道が備えられた」ということをユダヤ人に言ったんです。

我々からすれば、先祖伝来の宗教風土があった。それはそれで尊いけれども、そこへもう一つ別の本体がやってきた。いわば我々日本人にとっての旧約時代と新約時代との関係みたいなものです。いろんな宗教風土の中に最後の本命がやってきた。これがイエス・キリストの救いです。イエス・キリストの救いはどの民族にも、およそ人が人であるかぎり、普遍的である。非常に個性的でありながら普遍的である。民族それぞれにそれぞれの受けとり方をしてよろしい。ちょうど、太陽が一つの地球を照らしているのに、地球にはいろんな民族がいるように、神さまの啓示もいろんな民族にいろんな形で現れた。その集大成としてキリストという方がいてくださる。私にはそう思われる。霊界の太陽として、キリストはいてくださる。この太陽は平和なお方です。自ら武器を取らない。敵のために祈る方、自分を犠牲にして与えてくださる方です。しかも、それは神の御意であつた。パウロは言うんです、

「神の義はキリストの福音のうちに現れた。そして、信仰から信仰へと進ませる。キリストが十字架で死なれたことにおいて神の愛が現れた。神の愛は十字架に極まった」

と。自分の愛する独子ひとりごを十字架につけて惨殺しなければならぬ。神さまが惨殺したのではない。人間が惨殺するのにお委ねになった。その厳しい運命、使命というものをキリストは敢然かんぜんとお受けになった。十字架にかかる前夜のゲッセマネの祈りを通して。ゲッセマネの祈りでも苦しんで祈られた。でも、敢然と立ち上がって十字架にかかることを受けとられた。見事に人類の罪の贖いを果たされた。過去・現在・未来の全存在を、全人類を、しかも個人の過去も現在も将来もすべて救い上げてくださった。そういう偉大なる霊、これがキリストの霊なんです。

神も凄い霊でしょ。全宇宙をお創りになって、その安定を保っておられる凄い霊です。その宇宙的な神の霊を100%受けて、その神の御意みこころのままに歩んで、全人類の罪の贖いという誰もできないことをキリストはやってくださった。

ちなみに、お釈迦さんはやってくれなかった。素晴らしいお方ですよ、お釈迦さんは慈悲



深いからです。自分の本願の祈りで救いあげたい、衆生しゅじょうを救いたいと思った。それはそれで素晴らしいと思うけれども。キリストは自ら十字架にかかる犠牲を通して、具体性をもつて現された。だから、ローマ書8章のところに、

「³³だれが神に選ばれた者たちを訴えるでしょう。人を義としてくださるのは

神なのです。」(ロマ8:33)

と。反対する者は、「あの者はまだ罪びとです。この者はまだこんな悪いところがあります」と訴える。キリストは敢然とその前に立ちはだかつて、

「私の十字架の贖いはそんなに無力なのか！ 私の十字架に足りないところがあるのか！」

と叫んでおられる。この叫び。これを、皆さん、是非とも受けとってほしいんです。「自分の罪がどうだこうだ」なんて、もうそんなことはぶつ飛んでいるんですよ。もう問題ない。問題だらけの人間を「問題ない」という絶対的な世界にキリストは引き上げてくれた。

人間社会の基準は相対的です。すべて条件付きです。「ああだからこうだ」と、全部条件を付けられている。「あいつはこういう人だから、私は好きなんや。こいつはこんな人だから、嫌いなんや」とか。それはそれなりに意味がある。でも、そういう相対的な価値判断、相対的な価値評価、相対的な命の世界に対して、絶対なるものが現れた。しかも、その絶対なるものは愛そのものであった。その愛を十字架にかかり全人類の罪を贖うという姿で示された。どういう神の御意みこころか私にはわかりません。なぜ、イスラエルの民に示されたのか。なぜ、イエスというお方において示されることになったのか、私にはわかりませんけれども。具体的にイエス・キリストが十字架にかかってくださったことを通して、私たちの全存在を未来永劫に贖い取ってしまった。このことをローマ書8章において叫んでいるんです。

「罪と死のりの法を、生命いのちの御霊みたまの法のりが解放した。キリストによって。だからもはやあなた方は罪に定められることはない。絶対に安心だ。しかも、素晴らしい栄光の姿に我々は変貌させられる。この神の愛から我々を引き離すものは誰もいない」

と、そのことを絶叫しているのがローマ書8章なんです。

「自由」についてもここに書いておきましたが、もう皆さんと一緒に読む時間がありません。我々はストレートに(単刀直入に)キリストを受けとり、キリストに委ねる。それだけです。妨げるものは何もない。台風一過、実に清らかな空気が流れている。

「幸いなるかな、心の清き者、その人は神を見る」

と言われた。聖霊をお受けになったら、神さまが見えてくるんです。キリストにおいては神さまが見えているんですよ、皆さん。だから、我々人間の、「できない、できない、できない」の咄つぶやき、嘆きをキリストは、



「できる、できる、できる。あなたはできるんだよ、あなたは生命だよ」と、全部、マイナスな(否定的な)気持ちでプラスの(積極的な前向きの)気持ちに引っくり返してくれる。

「あなたは死なないよ、あなたは神の子だよ」

と。その大逆転をキリストは十字架にかかってくださることによって成し遂げた。どの教会にも十字架が立っています。皆さんの身体の中にも十字架を立ててください。この力は凄いですから。

「十字架という言葉は、滅びゆく者には愚かであるけれども、救われる我らに

は神の力なり」(コリント一1:18)

と、コリント前書にあります。十字架という言葉、十字架が叫んでいる言葉、これを我々は日本人らしく受けとっていく。東洋的感覚で。そのことを私は皆さんに訴えたいんです。

もう時間がきましたので、これで終わることにいたします。

●祈り

では、お祈りいたします。

主イエス・キリストさま、この永遠のひとときを与えてくださってありがとうございます。この空間を、あなたはこの地上から切り取って、天の空間としてくださいました。あなたがここにご臨在くださって、お一人お一人に私を通して、お一人お一人の魂に深く語りかけ、入りこみ、また抱いてくださいました。ありがとうございます。

どうぞ今日、お聴きになったことを本当のあなたからの言葉として——私はただ管にすぎません——あなたご自身の生命の言葉としてお受けいただいて、誰でも無条件に空気を吸っているように、

「私を吸うんだよ、私を食べるんだよ、私の生命を飲むんだよ」

と、そう仰ってくださいているあなたさまを単純に、本当にシンプルに受けとって、単純で健やかな日々をお過ごしくださいるように。そして日本を救っていただきますように。この人々が本当にこの世の塩となり光となり宝となって、この国を救い上げるような祈りに導いてくださいますように、希こいねがいたてまつります。一切を感謝して、主イエス・キリストの御名みにあつてこの祈りを御前みにお献げいたします。アーメン

